Osaka University Knowledge Archive

Title	美学と現代美術 : アメリカにおけるその乖離と接近をめぐって
Author(s)	金, 悠美
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43330
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【18】

氏　　名	金（きむ）　悠（ゆう）　美（み）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16708　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学　位　論　文　名	**美学と現代美術－アメリカにおけるその乖離と接近をめぐって－**
論文審査委員	（主査） 助教授　藤田　治彦 （副査） 教　授　神林　恒道　　教　授　上倉　庸敬　　教　授　圀府寺　司

論文内容の要旨

本論文は、第二次世界大戦後のアメリカにおいて、美学が同時代の現代美術といかに関わってきたかを、論文、学会記事、美術批評その他の資料から検証しようとした研究の成果である。

第1章では、1980年代の後半からアメリカの美学会内部で行われている、分析美学の批判的検証について考察している。イギリスの論理実証主義の流れを汲む分析美学は、従来の美学や芸術批評における言語上の混乱や不明瞭さの是正を目的とするメタクリティシズムであったが、言語分析に専念するために芸術作品との距離が生まれ、美や芸術についての言語を明確化しようとするその目的達成には困難と限界があった。A・ダントーは、ある対象が芸術であるか否かを決定するのは視覚的特性ではなく芸術の理論と歴史であると論じ、その後、G・ディッキーは、それを決定するのは芸術をとりまく社会的な制度であると論じた。以上のように指摘されている。

第2章では分析美学の支配過程をアメリカ美学会の史料をもとに検証している。1970年代以降、分析美学系の研究が増加し、他の研究が周縁に押しやられたが、学会創設当時は多彩な研究対象と方法論を併せ持つ学際的な学問が目標とされ、美学者と芸術家との連携を強化し、美術教育や批評などに関わる実践的な美学の確立が目指されていた。しかし、その学際性が災いし、基盤が確立されないまま分析哲学へと接近した。分析哲学的研究の閉鎖性と英米哲学への傾倒に対して内部から批判があがって見直しが計られ、現代実術を含む諸芸術や広い文化的現象の問題を取り上げようとする新たな試みが始まるのは1980年代からのことだった、という分析がなされている。

第3章は日本からの考察である。日本の美学研究はドイツ中心で、アメリカ美学は馴染みの薄いものだったが、日米交流により親密さを増した。1950年代の雑誌『美學』ではアメリカ関連の紹介記事が非常に多い。それは戦後の混乱期、アメリカ美学会は世界で唯一活発に活動していた組織で、国内における美学研究の確立だけでなく、国際交流の中心的役割をも果たそうとしていたからである。また、『美學』における関連記事が1950年代の三分の一以下に減少した1970年代はアメリカ美学内部での分析美学支配期と重なる。1980年代後半より急増する関係論文は哲学的美学ではなく、アメリカの現代美術を論じるものであった。以上のように分析している。

第4章ではB・ニューマンの発言をもとに、美学者と芸術家の美学的関心の隔たりを追う。その批判は客観的で価値判断を伴わない美学に向けられ、彼にとって芸術は単なる事実としては扱えないものであり、芸術記号論のように作品を単なる象徴として分析することは受け入れられなかったと指摘している。また、芸術を言語モデルから論じる美学と、芸術の現象学的側面が問題となる作品とのあいだに溝が生まれたとする。

第５章ではＪ・デューイの美学が分析美学によって排斥された原因を探るＲ・シュスターマンに注目し、科学的な還元主義によって問題を先鋭化させる分析美学のほうが、問題を包括的に取り込んで境界をなくしてしまうデューイの美学よりも学問として受け入れられたが、その理由は、前者が近代文化全体のパラダイムである科学に適合していたからであると推論する。また、美術批評において支配的理論となったフォーマリズム理論と分析美学は、互いに相容れない性質を持ちながらも、科学を規範にした純粋還元主義という点で共通していたと指摘している。

第６章では1980年代以降、美術への再接近とヘーゲル主義者への転身によって注目を集めているダントーの芸術終焉論とポスト・ヒストリカル・アートの状況に関する哲学的省察について考察し、その芸術終焉論で終末を迎えているのは芸術ではなく、内的必然性に突き動かされて発展してきた美術の歴史であり、その終焉とは、停止ではなく、完結を意味すること、そして芸術の歴史終焉以後の美術がおかれている状況はプルラリズムであることが最大の論点であることが確認されている。ダントーは分析美学者に共通する芸術と非芸術を明確に区分けし分離する考え方を継承し、芸術の哲学的性質のみを強調し、美的な質、とりわけ美的経験の概念を排除しているとシュスターマンは批判するが、ダントーの美術批評に注目すれば、その芸術論におけるヘーゲル主義への転向と分析美学の継続、すなわち歴史主義と本質主義のパラドキシカルな併存は、現代美術を批評するための戦略として機能していると指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論はイギリスの論理実証主義の流れを汲んで興隆したアメリカの分析美学研究の展開をたどり、日本の美学研究と比較して、その現代美術からの乖離を指摘し、さらに分析美学以前のデューイの美学との比較も加えてさらなる問題点を指摘したのちに、デューイの美学の芸術論としての不備な点を上げ、芸術と非芸術を明確に区別するダントーの芸術論を支持して論を結んでいる。このような論文の構成自体、極めて独自のものであり、この研究において先ず高く評価されるべきことであろう。

以上のような論の展開ののちに、ダントーにおける一見相容れない思考の併存は、芸術作品の自律性や純粋性、そして視覚的特性を重んじる理論がいまだ優勢な1980年代の美術の状況にあって、芸術に本来的に備わっている哲学的特質への注意を促すためのものであり、特定の支配的芸術理論から解放された新しい芸術の認識方法を提示するものなのであるという結論に達している。

論文の一部においてＬ・ゴアによる研究およびＲ・シュスターマンによる研究に依存するところがやや多いという嫌いもあるが、その依拠する点を明らかにして、独自の論述を行なっている。また、その必然性が極めて高いとまでは言えないものの、日本の美学研究との関係についての考察をもまじえた、アメリカの美学および美学会の歴史的分析は独自のものである。この研究が今日の美学研究および美術批評理論のあり方を考える上で、重要な問題を提起していることは、高く評価されてよいであろう。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。